

【研究ノート】

翻訳長編小説と訳注の問題

貝瀬 英夫

翻訳長編小説の訳注は、いかにあるべきか？

これは、なかなか難しい問題である。微に入り細に入り、詳細に訳注が付けられているものがあるかと思えば、訳注が極めて少なく、あっさりした感じのものもある。その中間で、「適度に」訳注が付けられているものもある。

訳注は、もちろん作品の本文ではないのだから、さほど注意を引かないことは確かである。その作品の主役ではなく、言わば「脇役」なのであるから、それは当然のことであろう。

しかしながら、巻末に付けられるのが通例である訳注は、翻訳長編小説を読む際に、意外に気になる存在である。つまり、一応参照しなければ何か片手落ちになってしまうのではないかという気にさせるくらいの存在感を持ったものなのである。全く参照しないで本文だけを読み進めていくには、大げさに言えば少しばかり勇気がある、そんな気にさせてしまうものなのである。

几帳面な読者であれば、本文に訳注を示す小さな数字が出て来る度に、その時読んでいる場所に指や何かを差し挟みつつ、巻末の訳注を参照することであろう。その訳注がかなり長い場合には、当然のことながら読むのに時間が掛かる。それだけではない。小説の文章と訳注の説明的な文章は、全く性質が異なるから、それまで浸っていた小説の世界から、一時的に現実の世界に引き戻されてしまいかねないのである。そして、訳注を一応読み終わって本文に戻った時には、物語の興趣は薄れてしまっている、ということもある。

ここで翻訳「長編」小説としたのは、同じ翻訳小説でも「短編」あるいは「中編」であれば、訳注の分量もそれほど多くなることはなく、たとえ参照したとしても、読者にとって大きな負担になることはないであろう、ということからである。

訳注を参照することによるメリットも、もちろん少なくはない。一般論で言えば、訳注が付けられている語句は、そのままでは理解しづらいことが多い。訳注を参照することなく、理解不十分の状態で先に進むよりも、多少読書の興趣がそがれても、参照した方が良いかもしれないのである。ここが、一番難しいところであろう。

問題は、訳注の数の多さと分量かもしれない。多くの語句に訳注が付けられ、またそれぞれの訳注の分量が非常に多い場合には、本文から離れざるを得ない時間が当然長くなっ

てしまうので、小説を読んでいるのか、訳注の説明を読んでいるのか、わからなくなってしまうことになる。

ただ、例外とも言うべき場合がある。それは、「研究」を主な目的にした翻訳長編小説である。それは古典的な作品にしばしば当てはまるが、そのような場合には、訳注の分量が多い方が意義深いことになる。むしろ、訳注が大量であればあるほど、また緻密であればあるほど、その翻訳は研究の面で価値がある、ということになる。このような場合、訳注を読まずに本文だけを読むだけでは、その作品を十分に、そして深く理解することはできない、ということになるのであろう。

しかし、当然のことながら、「楽しみ」のために長編小説を読む場合には、大量の訳注は、煩わしい以外の何物でもないのではないだろうか？ 訳注がなければ、どうしても意味が通じないことも、多々あるかもしれない。だが、たとえそうでも構わないという読者も、かなり多いのではないかと推察されるのである。

本来、物語や小説は「楽しみ」のために生まれたものである。それらは、元々「研究」の対象ではなく、あくまで人々の楽しみであり、娯楽だったのである。物語や小説が学問研究の対象になったのは、それほど昔のことではない。あまりにも研究面に重点が置かれすぎると、訳注は自然に多くなりがちであり、その結果、「楽しみ」という要素からは離れて行かざるを得なくなってしまうのではないだろうか？

このように考えてみると、「楽しみ」としての小説から遠ざかることなく、訳注を付けるのがちょうど良い、ということになりそうである。

もちろん、「研究」のためということでは割り切って、たくさんの有益かつ詳細な訳注を付けることを否定するものではない。それはそれで、一つの目的を持った、翻訳の方向性であるように思われる。それらは、多くの学者たちの研究成果の累積に他ならないからである。

ただ、あまりにもわかり切った語句、必要ならば読者がすぐに調べられる語句にまで訳注を付けることは、あまり褒められたことではないのではないだろうか？ 翻訳長編小説を読む際に、訳注の多さに辟易とする読者はかなり多いように思われる。極端な例を出すと、「パリ。フランスの首都。人口、何千万。・・・」といったようなものである。ここまで訳注を付けられると、読んでいるその本を放り投げたくなる読者もいるようである。

長編小説は、ただでさえ読了するのに膨大な時間が掛かる。ましてや「翻訳」長編小説ということになると、尚更スムーズには読み進められないことが多い。そこへ持って来て、膨大な訳注がページごとに立ちはだかっているということになると、途中で挫折してしまいかねないであろう。それは訳注だけが原因とは限らないであろうが、その一因になっているかもしれない。

私事になるが、筆者は2018年（平成30年）に、スコットランドの詩人・小説家であるウォルター・スコットの小説『好古家』（1816年）を翻訳・出版した。700ページ弱という大部の本であるが、当初、この翻訳に数百という訳注を付ける予定であった。訳出を進めながら様々な語句に注を付けていった訳であるが、当初その1つ1つがどれも重要で捨てがたいものばかりであるように、筆者には思われた。

この小説の主人公は、平穏な好古趣味を送る初老の紳士なのであるが、非常に博識で、かつ、その博識を吹聴する傾向があるため、彼の話の中で実に多くの文学者や歴史上の人物が言及されるのである。最初は、そういった人物や出来事などにことごとく訳注を付けていった。当然、訳注は膨大なものになってしまった。

初校が出来上がった頃、少しばかり思うところがあって、翻訳小説の訳注というものについて、ネットで調べてみた。そうすると、そこには、ある意味驚くべき意見がいろいろと書かれていたのである。それは、訳注というものが言わば無用の長物であること、「あらずもがな」のものである、ということだった。身近な人間にも意見を聞いてみると、やはり同じ意見で、訳注などというものは、少なければ少ないほど良い、その方が小説として楽しく読める、ということだった。

翻訳小説には「訳注」というものが不可欠のもので、しかもそれは多ければ多いほど良い、詳細であればあるほど良い、という言わば先入観にとらわれていた筆者にとって、そういった意見や考え方は、自らの「訳注」観に対して、大げさに言えば「コペルニクス的転回」を迫って来るものだった。

筆者は、迷いながらも当初数百あった訳注を少しずつ削ってみることにした。最初は、せっかく作ったのにもったいない感じがして、心理的にかなり抵抗があった。しかし、何段階かの思い切った「整理」を経て、最終的には十数個の訳注に絞ることができた。世に言う「断捨離」に近い感覚で、1つ1つの訳注が果たして本当に必要なのかどうか自問自答を繰り返しながら、絞っていったのである。その結果、巻末の訳注は、わずか2ページを占めるのみとなり、全体として非常にすっきりしたものになった。

このことによって、読者は、この作品を読んでいる最中に、頻繁に訳注を参照するという煩わしさから解放され、その分だけ作品本体を楽しく読むことが可能になった、と考えている。

ただし、訳注は大幅に減らしたものの、1つだけ工夫したことがある。それは、固有名詞を中心に、読者にとって馴染みのないと思われる箇所に、ごく簡単な説明を付した、つまり本文中に埋め込んだことである。例えば、「詩人〇〇」といった具合である。こうすることによって、読者にとっては恐らく初耳のその人物がどういう時代の、どういう作品を

残した詩人か、ということまではわからなくても、おおよそのイメージをつかみやすくなったのではないかと考えている。

翻訳長編小説は本来、楽しむために読むものであろう。最初から「研究」のために読むというのでは、本質から外れてしまっているような気がする。読んで楽しめる翻訳小説であるためには、どうしても必要な場合を除いて、できれば訳注は少ない方が望ましいのではないだろうか？